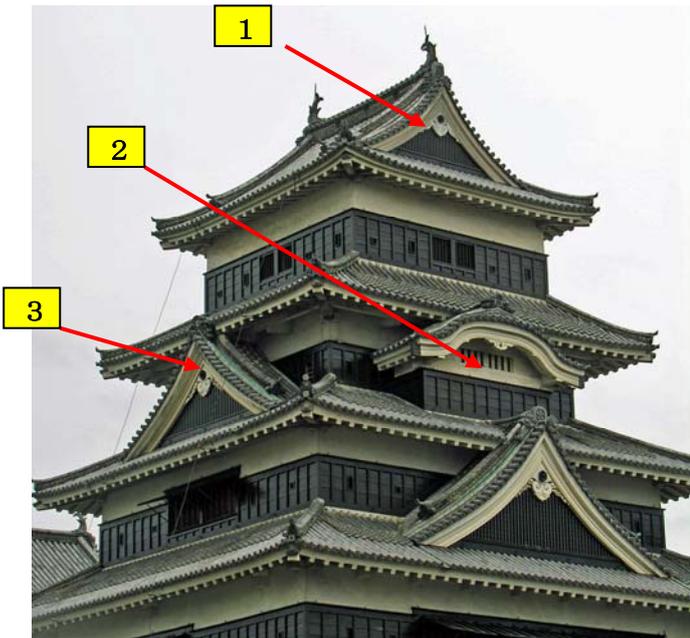
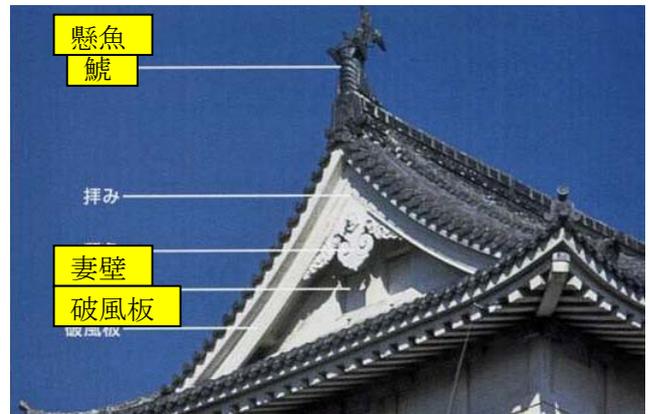


天守の意匠 破風と懸魚ガイド

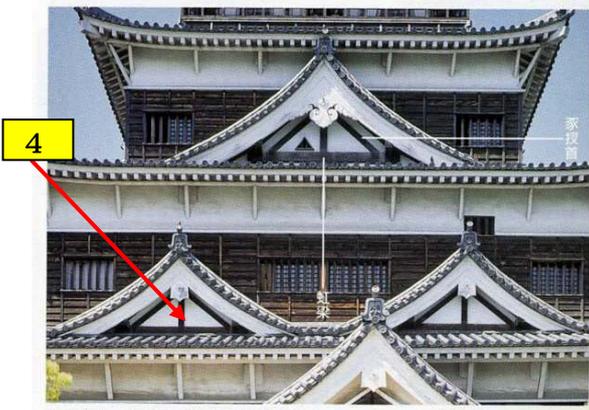
破風とは 入母屋造と切妻造の屋根は、両端に妻壁（つまかべ）という三角形の垂直な壁面ができる。この部分を破風といいます。入母屋造の屋根なら**入母屋造破風**、切妻造の屋根なら**切妻破風**と呼ばれています。破風は屋根の端部となるので、破風の上には巴瓦（ともえかわら）や鬼瓦、最上階なら鯨（しゃち）が載ります。破風の先端には破風板が取り付けられ、その**挿み（おがみ）**・・左右の板が節する部分・・には**懸魚（げぎょ）**という飾りが垂れ下がります。



破風の種類は 入母屋破風（写真1）、三角形の出窓のような形の**千鳥破風**（写真3）、頭部を丸く造った唐破風（からはふ・・写真2）、隣あわせに屋根を二つ並べたものが比翼（ひよく）で千鳥破風を並べると比翼千鳥破風（写真4）、入母屋破風なら比翼入母屋破風となる。天守の外壁に出窓を造り、その上に小さな屋根を

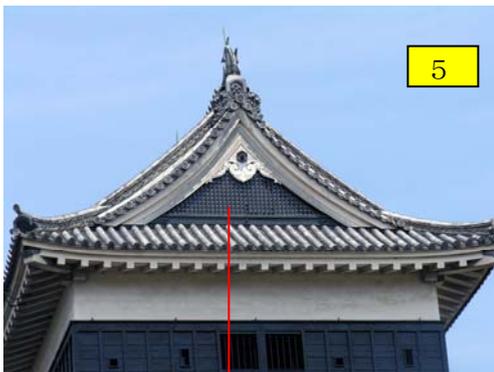


挿み



載せると、それが破風となる。大型の出窓では入母屋破風とし、小型の出窓なら千鳥破風、ちょっと気取れば唐破風の出窓となる。こうして破風で天守を飾ります。

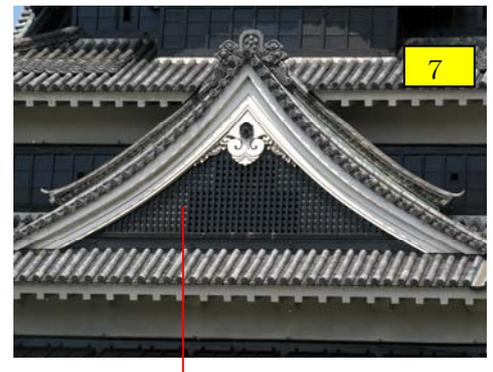
松本城の破風は 写真1～3のように南西面に破風がみられる。5重目の入母屋破風（写真5）、3重目の唐破風と千鳥破風が2つずつ（東西南北面）（写真6）、2重目の千鳥破風（南面）（写真7）がみられます。写真4のような比翼はありません。破風が少ないのも特徴で、松本城は戦いに備えた天守だからでもあります。



木連格子の破風

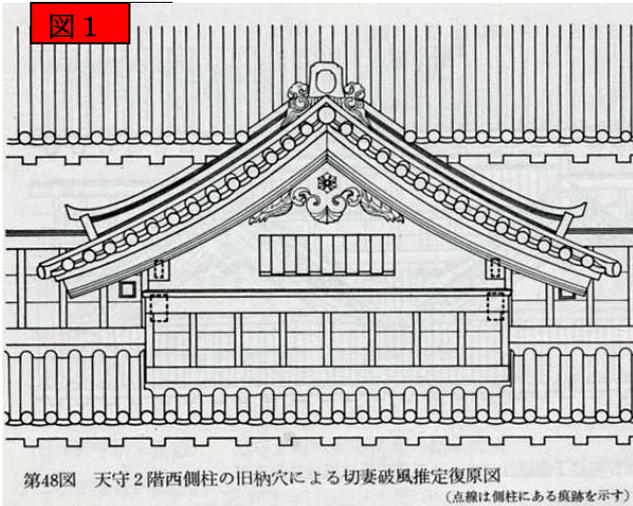


竪格子窓の白漆喰絵籠



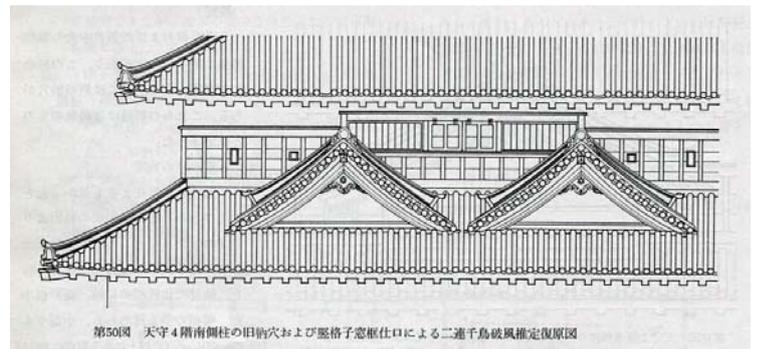
木連格子の破風

解体復元からは 写真8のように天守3重北面唐破風木地（昭和26年12月）が確認された。唐破風の破風板がよく分る。曲線の破風板2枚が合わさったものである。破風板に筋が入って掘り込みがみられ、複雑である。塗り込めをすると、平面でなく段がつくことになります。



第48図 天守2階西側柱の旧柄(ほぞ)穴による切妻破風推定復元図
(点線は側柱にある痕跡を示す)

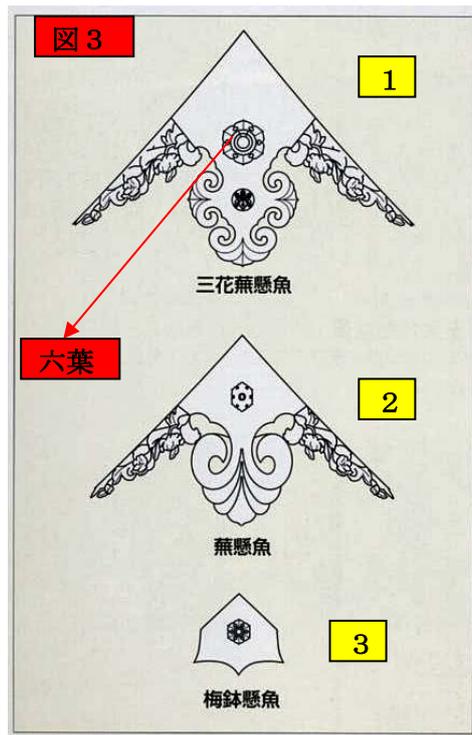
図1は、天守2階西側柱の旧柄(ほぞ)穴による千鳥破風の推定復元図です。使用の有無その他の旧規が不明であったので復元しませんでした。また、図2は、天守4階南側柱の旧柄穴および堅格子窓框(まかち)仕口による二連千鳥破風推定復元図です。南側2重上に2連(比翼)の千鳥破風が並んでいたと推定されます。



第50図 天守4階南側柱の旧柄穴および堅格子窓框仕口による二連千鳥破風推定復元図

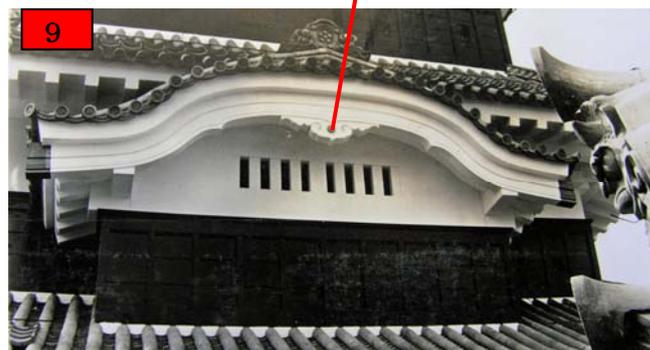
松本城の懸魚(げぎょ)は

破風板の拌みには懸魚が垂れ下がっています。本来の懸魚の役目は、破風板の拌みの後方にある棟木の先端を隠すことにあり、そのため桁隠(けたかくし)ともいっていました。懸魚の種類には、図



3-2の蕪(かぶら)懸魚が多く天守に用いられています。松本城の入母屋破風と千鳥破風にはほとんどがこの蕪懸魚が用いられています。入母屋破風には図3-1のような三花(みつばな)蕪懸魚(蕪を三つ束ねたもの)を用いて豪華にすることがあります。また、小さな千鳥破風では、図3-3の梅鉢懸魚(うめばち)を用いる。これら三種を使い分けて、均整をとっています。松本城では図3の1と3はみあたりません。

唐破風の懸魚は特殊で、写真9のように厚くて横長の形をしています。これを兔毛通(うのけどおし)と呼ばれてい



ます。松本城でも用いられています。(写真9)